

イスラエル北部のテル・エンゲヴ遺跡と テル・レヘシュ遺跡の発掘調査

天理参考館 山内 紀嗣

1 調査の経緯

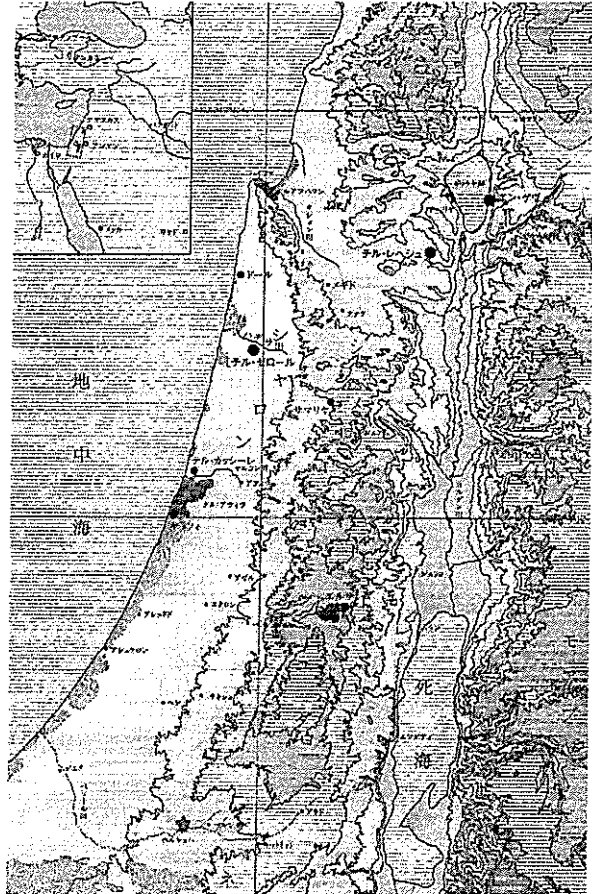
イスラエルに日本人の手で最初に調査が行われたのは1961・1964年のイスラエル北部にあるアムッド洞穴の旧石器人の調査であるが、次に本格的な調査として行われたのがシャロン平原にあるテル・ゼロールという遺跡である。

1964年から1966年と1974年に東京大学の太田清氏(宗教学者)を中心に行われた。しかし、その後はイスラエルの国際情勢などから発掘調査は中断していた。また、テル・ゼロール遺跡は聖書の記述にみられる当時の都市のどれとも判定できなかった。

その後、1990年からは天理大学の金関 恕氏が団長となりガリラヤの東、ゴラン高原の下にあるエン・ゲヴ遺跡の調査を開始した。この調査は途中で団長が立教大学の月本昭男氏へと代わり、2004年まで行われた。また、2009年からは慶應義塾大学の杉本智俊氏が調査を始めている。

一方、テル・レヘシュ遺跡は2004年のエン・ゲヴ遺跡の調査終了にともない、新たに開始したものである。遺跡は南ガリラヤ東部にあり、エン・ゲヴ遺跡からは南西へ約30km離れる。遺跡の調査は2006年から始まり、2009年まで5次にわたって行われた。当初は置田雅昭氏が団長であったが、現在は月本昭男氏が引き継ぎ、今年の夏も継続して調査が行われことになっている。

ここではエン・ゲヴ遺跡とテル・レヘシュ遺跡について説明する。したがって、最終的な報告ではなく、その成果については今後、変更される可能性があることをことわっておきたい。

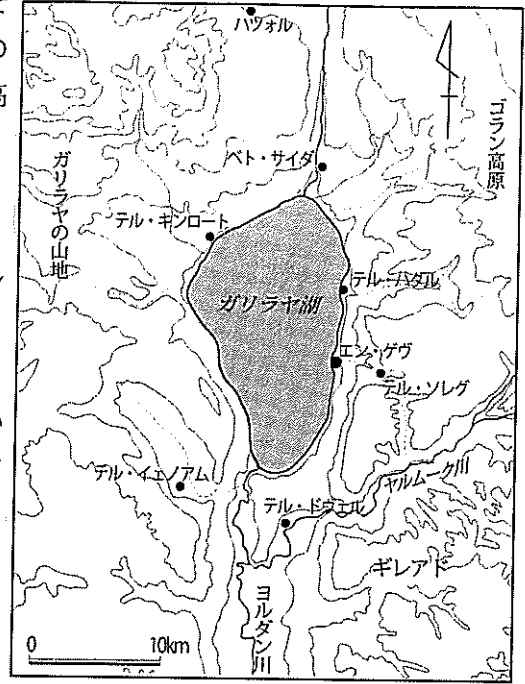


イスラエル北部はガリラヤ地方と呼ばれるが、その東にガリラヤ湖という淡水の湖がある。この湖の東岸にエン・ゲヴ遺跡がある。湖の東にはゴラン高原が迫っている。

エン・ゲヴ遺跡は南北に長い低い丘で、南北 250 m、東西約 120m ある。北側が最も高く約 3m しかない。遺跡のアラビア語名はヒルベット・エル・アシェクという。

1961年にイスラエル人が遺跡の西側と斜面と南端で試掘調査を行い、鉄器時代の遺構が重なっていることがわかってきた。私たちは遺跡の北にあるアクロポリスと呼ぶ高まりとその北・東斜面について発掘した。その結果、遺跡は鉄器時代Ⅱ期に始まりペルシャ時代、ヘレニズム時代、ローマ時代と続くことがわかった。そのうち、鉄器時代とヘレニズム時代の建物跡に見るべきものがあった。

鉄器時代の遺跡には、町を巡る城壁とその内側に列柱式建造物が見つかった。列柱式建造物は平面長方形の部屋の内部を長軸に平行に2本の石柱列で3分割したもので、鉄器時代の南レヴァント地方に流行した建造物である。また、

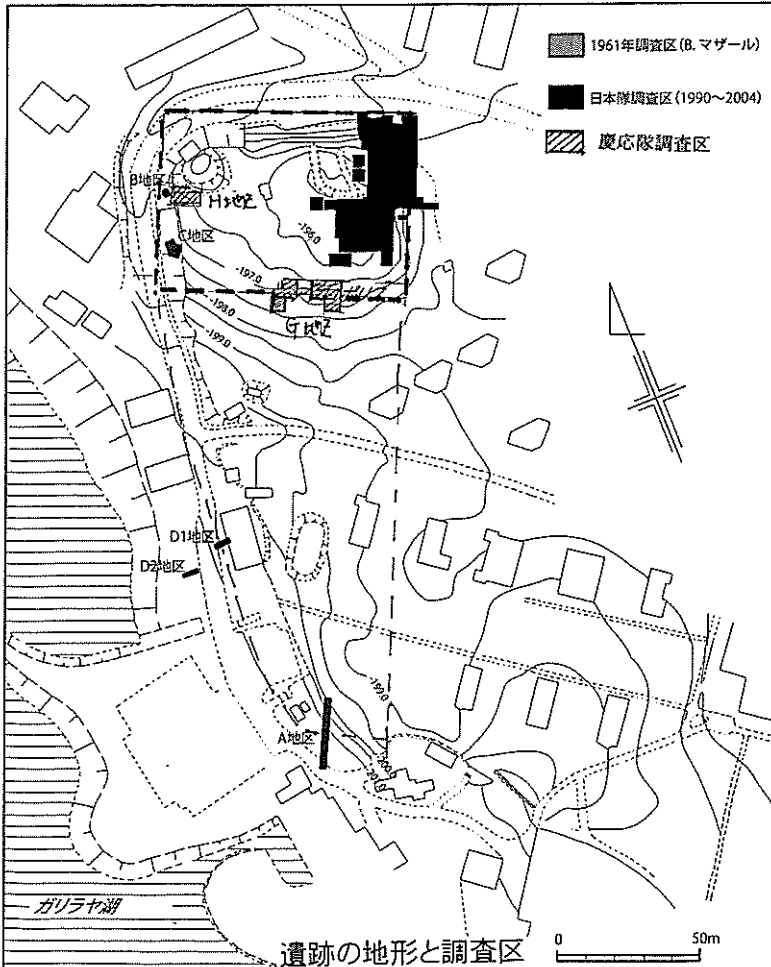


ガリラヤ湖周辺の遺跡

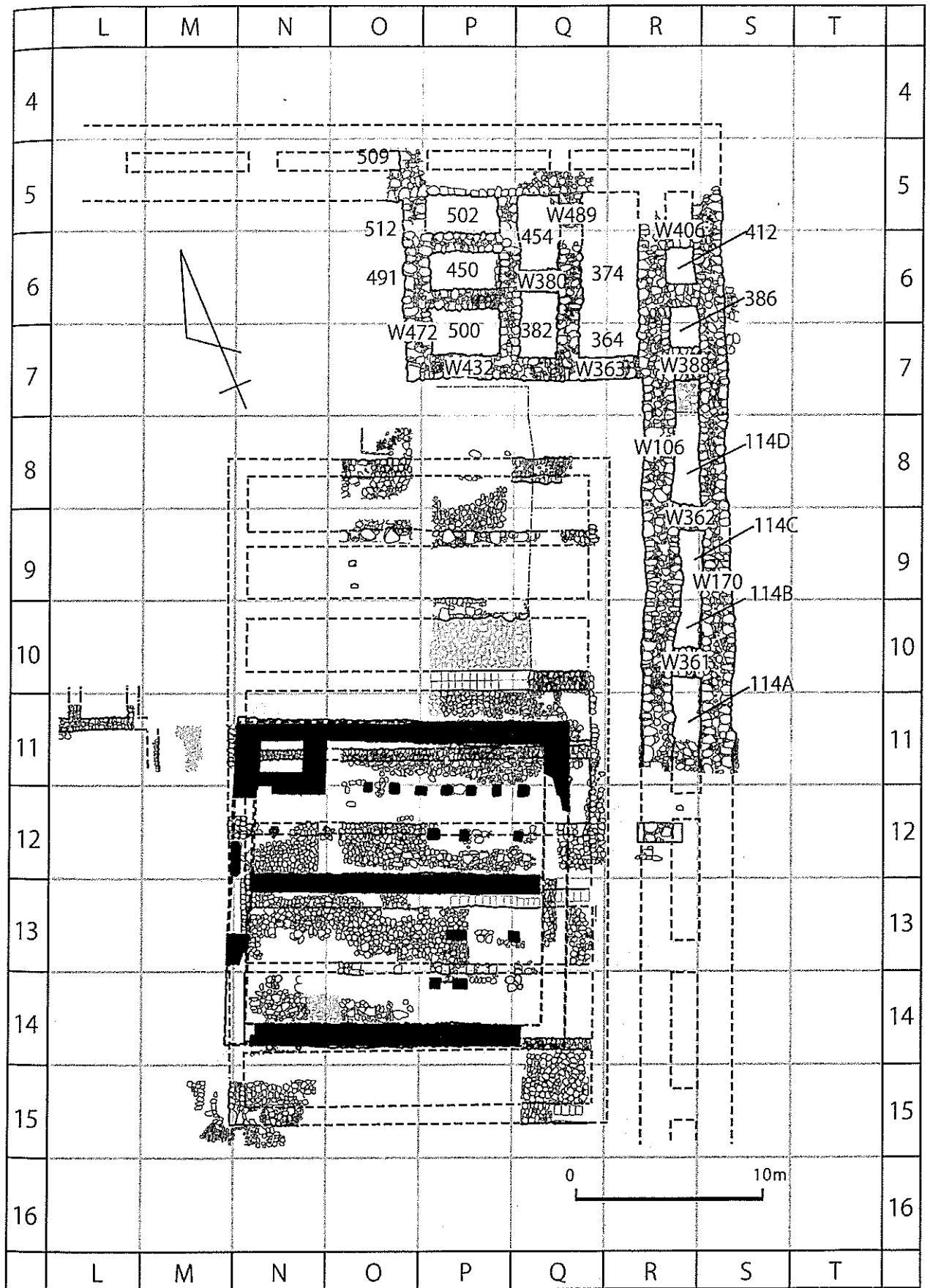
その外側を囲む城壁はケスメトウォールと呼んでいる壁が二重になる形式のものである。ケスメトウォールはこれも古くはメソポタミア地方で始まったが、この時期にイスラエル地域で流行した壁の作り方である。

城壁は南北に約 35m 分確認した。城壁は南北に直線的に延び、北端は直角に西へ屈曲する。壁は二重になっており、間には土が詰められていた。1枚だけの厚くて頑丈な壁を作るより、簡易な作りといえる。外壁・内壁とも厚さは 1.5～1.7 m あり、間を合わせた厚さは約 4.5m となる。壁の底は上面から深さ約 3 m あり、石敷きとなっている。

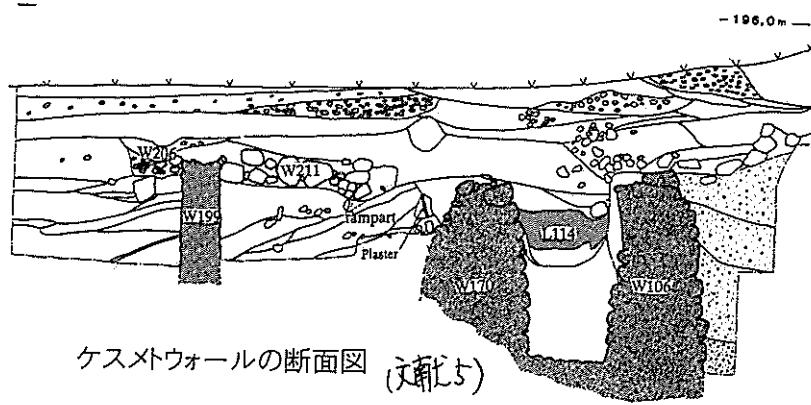
城壁の北東には小部屋を沢山集めたような部分があるが、これは物見的な塔があったと考えている。列柱式建造物は上下2層が重なって



遺跡の地形と調査区



アクロポリス部の遺構平面図(文献9)



ケスメトウォールの断面図 (文献5)

いた。共に城壁の方向と平行しており、城壁に合わせて築造したとわかる。下層のものは列柱式建物が3棟繋がった配置になっている。1棟は東西約20.6m、南北12.8mある。それぞれが2条の柱列の間には石敷きがなく、通路とみられる。その両側は石敷きになっている。全体で東西

19.8m、南北34.77mとなる。出土遺物はほとんどなかったが、土器片から鉄器時代ⅡB期(紀元前9世紀)と考えられる。

上層の列柱式建物は下層の南側の2棟と重なっている。上層のものは2棟が連結した形である。1棟は東西19.8m、南北8.1mある。全体では東西19.8m、南北17.8mある。北側の部屋には北西隅に小部屋が設けられていた。北側の部屋では柱を立てた石灰岩製の立石が12本は残っていた。ここでも出土遺物は少ないが、鉄器時代ⅡC期(紀元前8世紀)と考えられる。

さらにその上層ではヘレニズム時代の建物群が26部屋分みついている。この時期の建物は高い西側から、東側へ順次拡張していつている。

この遺跡は鉄器時代の遺跡がこの地域には非常に少なく、また、遺跡の東上のゴラン高原にフィクというアラブの村があったことから『旧約聖書』の「列王記」にみられる「アフィク」ではないかと考えられていた。

鉄器時代にはイスラエル王国とその東北のアラムダマスカス王国が戦っており、その戦場となっていたのである。

「列王記」(20—26～30)



ケスメトウォールの発掘

26 年がかわってベン・ハダドはアラム軍を動員し、イスラエルと
27 戦うためにアフェクに攻め上った。イスラエル人も動員され、
彼らを迎え討とうと出撃した。アラム人が国に攻め入って広が
っている間に、それに対抗して陣を張ったイスラエル軍は、やぎの
二つの群れのようなであった。

28 そのとき、神の人が1人イスラエル王に近づいて言った、「主は
仰せられる、主は平原の神ではなく山の神であるとアラムは言っ
た、だから私はあの大军をおまえに渡す。そうすれば私が主であ
ることを、おまえは知るだろう」。

29 七日間両陣営はにらみ合っていた。七日め、戦いは始まった。

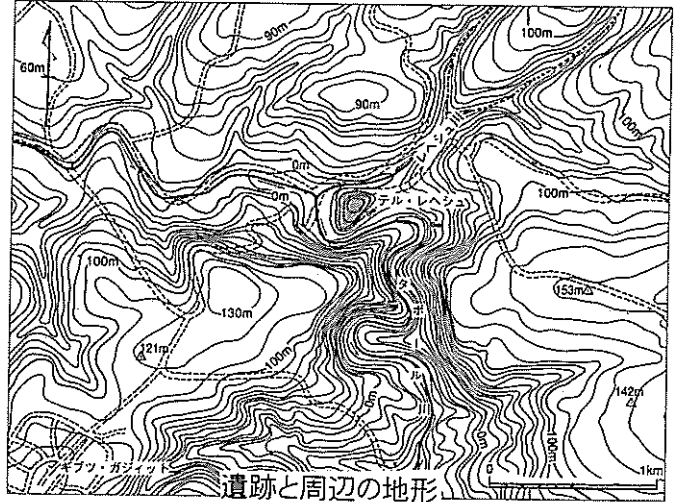
30 イスラエル人は一日でアラム人の歩兵十万人を殺した。残りはア
フェクの町に逃げ出したけれども、その二万七千人の生き残りの
上に城壁がぐずれ落ちた。ベン・ハダドも逃げ出し、町の天守閣
に逃げ込み、部屋から部屋へと走って身を隠していた。

(『聖書』フェデリコ・バルバロ訳 講談社 による)

この記事はイスラエルが勝ったことになっているが、この遺跡も両者の間で取りつ取られつしていたことが伺える。現在でもイスラエルとシリアの国境に位置しており、紛争の地であったことがわかる。この記述がどの程度、真実を伝えているかは不明である。また、城内に2万7千人も入ることができるとは考えられず、かなりの誇張があると考えざるを得ない。アフィクについてはガリラヤ湖の北にあるベトサイダ遺跡を想定する意見もある。

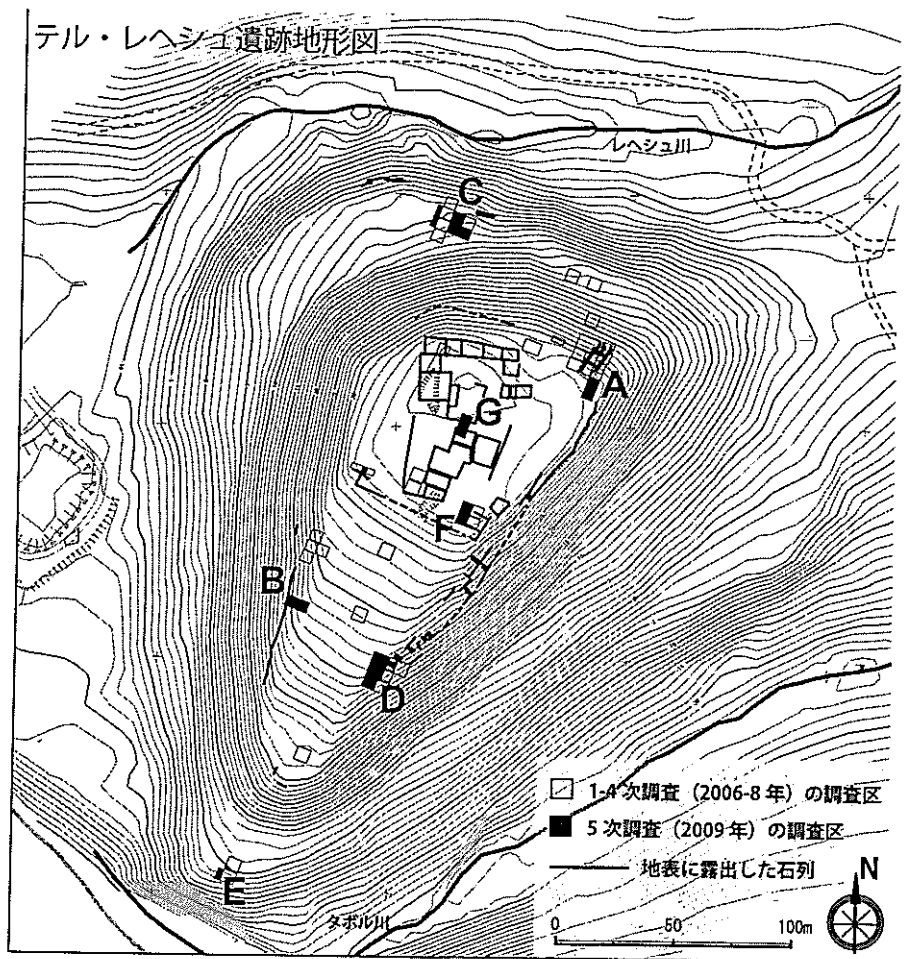
3 テル・レヘシュ遺跡

イスラエル北部、ガリラヤ地方南部の東に位置する。遺跡は前期青銅器時代からローマ時代まで断続的に営まれていた。遺跡は南北長約350m、東西幅約250mあり、平面は北にやや広い紡錘形である。高さは約35mある。発掘は2006年より始めており、現在までに大きく6カ所で行った。北側の最高部には一辺約80mの区画があり、(文庫15)あるいはローマ時代の遺構を反映

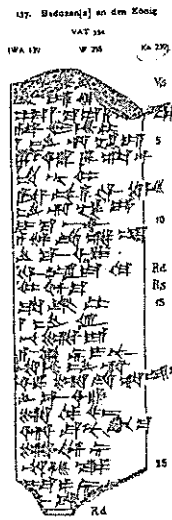
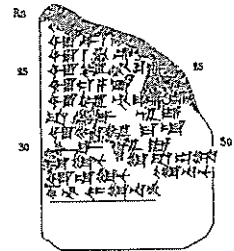
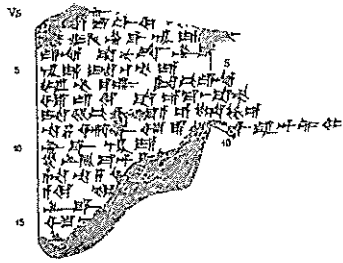
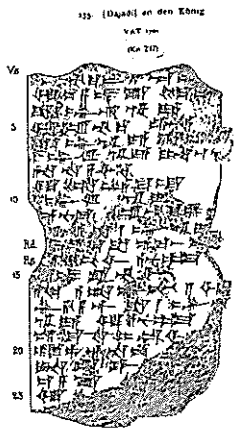


しているのかもしれない。遺跡の周囲はワディ(涸川)で囲まれており、水の不便はそんなにない。しかし、山地の谷地形に築かれており、交通の便は良くない。

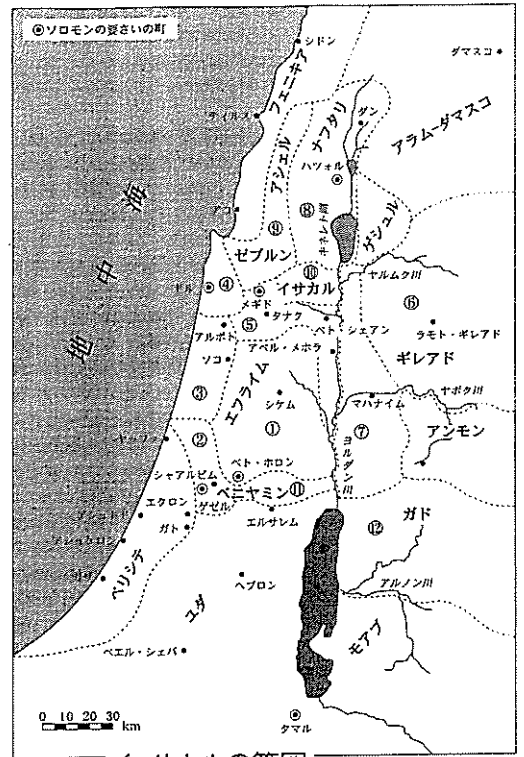
遺跡の調査が行われる前から土器などの表面採取がおこなわれており、近くのキブツ・エンドールの小さな博物館に遺物が収蔵されている。このあたりは『旧約聖書』にみられる「イッサカル」の地であり、テル・レヘシュはそのうちの都市のひとつであった「アナハラト」と考えられている。アナハラトはエジプトのトトメス三世とアメンホ



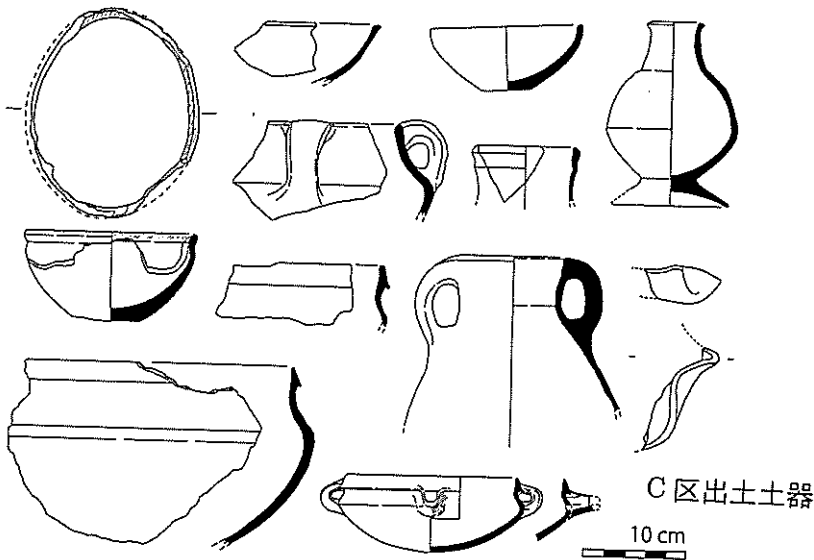
テル・レヘシュの地形と発掘調査区 (文庫19)



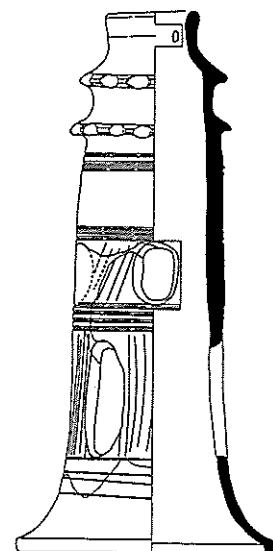
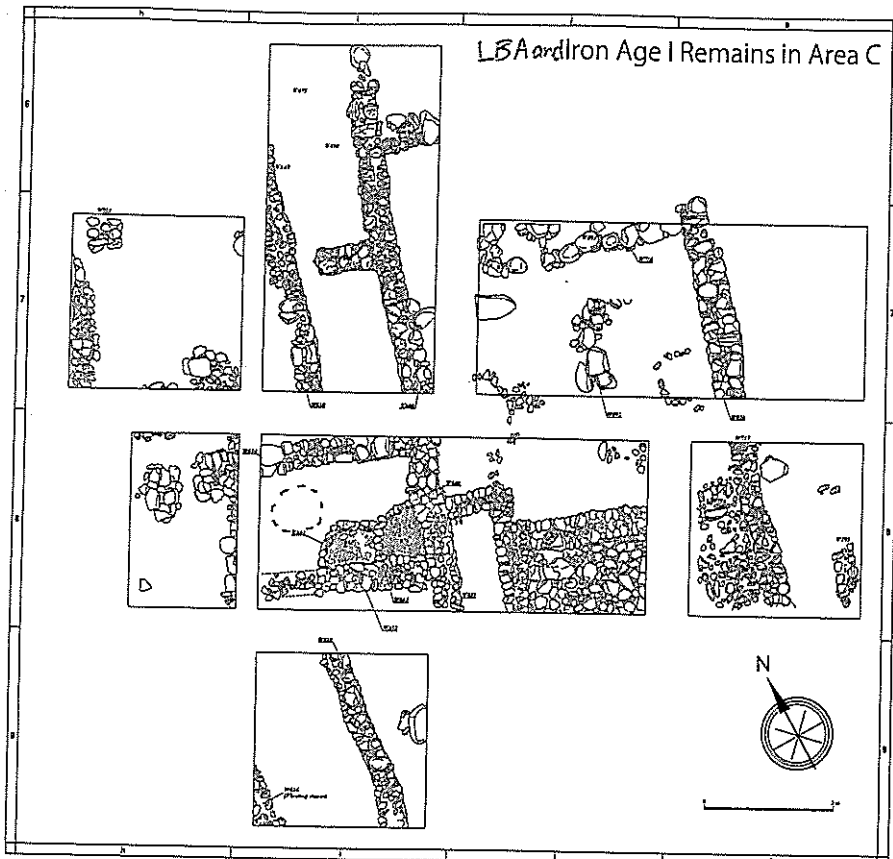
アマルナ文書(左から No.237・238・239)
(文第14)

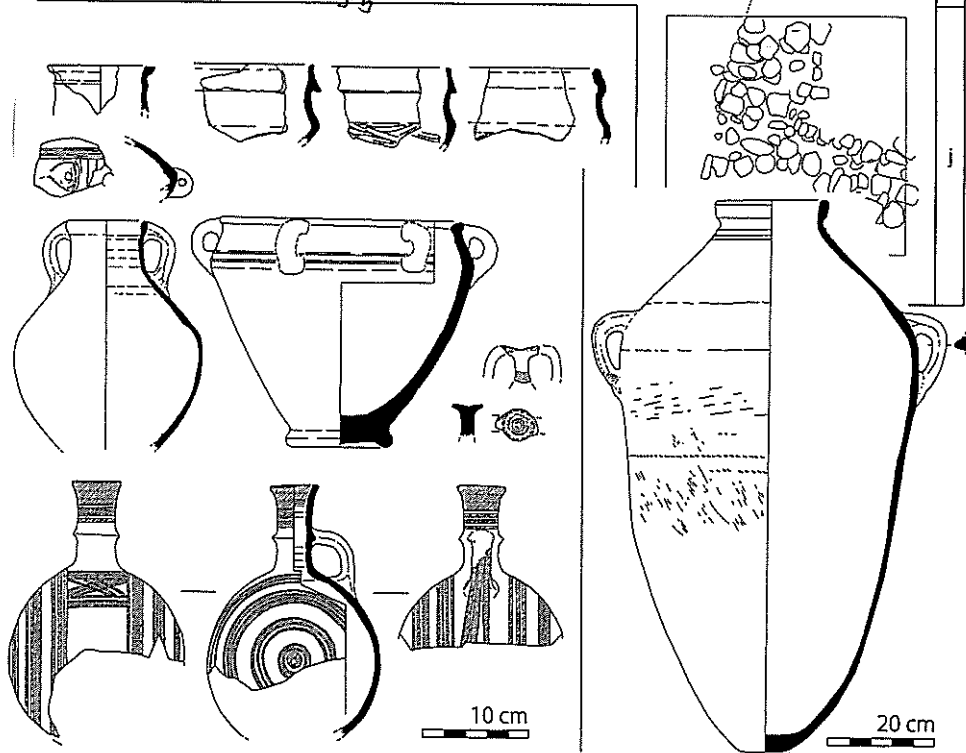
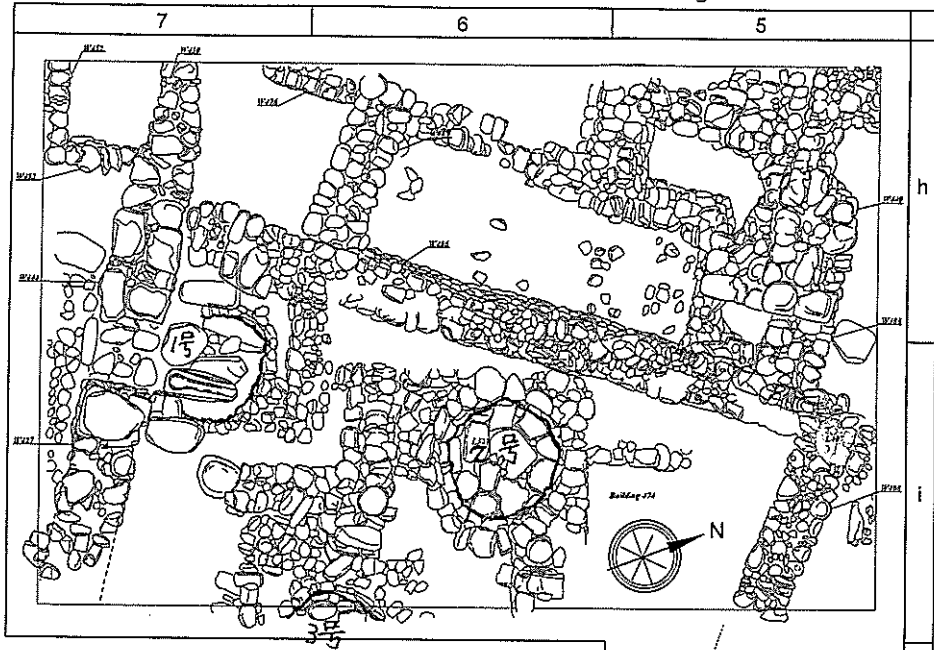


イッサカルの範囲

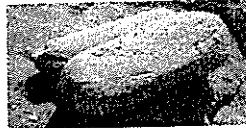
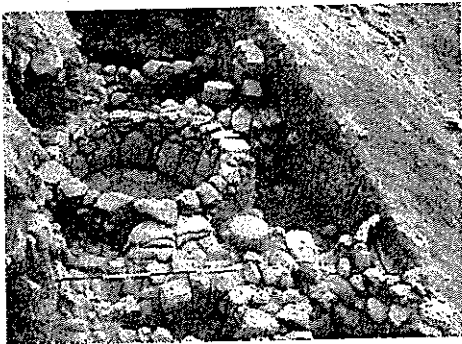


出土版面





D区出土土器



円筒形の石

左2号、右3号(南より)

テプⅡ世の遠征記などにみられる「i-n-h-r-t」とされている。また、最近ではエジプトのアマルナ文書の胎土分析がなされており、胎土中に表層玄武岩が含まれる3点がある。これまではどこからエジプトへ出されたのか不明であった No.237・238・239 が下ガリラヤ東部の胎土であり、当時この地域で突出していたのはテル・レヘシュ遺跡しかないので、これらの3点はテル・レヘシュから送った文書である可能性が高いらしい。

見つかった遺構のうち C 地区では鉄器時代の建物の基礎と後期青銅器時代の遺構などが部分的にはあるがみつまっている。また、鉄器時代初期の層位からは祭儀用の器台、また、土製の仮面の破片などが出土した。7-j 区ではマツェバラらしい立石もあり、祭場であった可能性が高い。さらに下層では中期青銅器時代の建物の一部や前期青銅器時代の遺物も出土している。

D 地区では後期青銅器時代から鉄器時代にかけての建物跡が見つかった。建物の内側には円形の遺構が設置されていた。円形遺構は3基あり、後期青銅器時代から鉄器時代初期にかけて順次作り替えられている。1号はまだ中を掘りきっていないが直径約1.8m、中に玄武岩製の溝のある石製品が出土している。後期青銅器時代とみられる。2号は完全に残っており、直径は約2m、深さ約80cm、壁面は板石を縦に用いており、やや外側に傾斜する。底も板石を敷いており、1方向へ傾斜する。最も低い位置には直径30cmほどの石製容器が設置される。石と石の隙間には黒色粘土が詰められている。さらに3号は2号の南東1.5mにあり、壊されているが直径は約1.5mに復元できる。これにも底には石が敷かれていた。こうした遺構は他の遺跡の例からオリーブ油を絞るためのオリーブを砕く施設と考えられる。オリーブ油搾油施設の一郭と見られる。施設は1号、2号、3号の順に築かれている。こうしたオリーブ破碎施設は遺跡南端の E 地区でもみつまっているほか、鉄器時代Ⅱ期に含まれる F 地区でも出土している。

現在、遺跡の周囲は丘陵上で小麦・すもも・ピーナッツなどが生産されているが、当時は農業に適した環境とはいえない。テル・レヘシュはあるいはオリーブ油を交易の主な資源としていたとも考えられる。

THE HISTORICAL-ARCHAEOLOGICAL PERIODS

<i>Bronze Age (Canaanite Period)</i>			<i>Hellenistic Period</i>	
Early Bronze Age	IA-B	3300-3000 BCE	Early Hellenistic period	332-167
Early Bronze Age	II	3000-2700	Late Hellenistic period	167-37
Early Bronze Age	III	2700-2200	<i>Roman and Byzantine Periods</i>	
Middle Bronze Age	I (EB IV-Intermediate Bronze)	2200-2000	Early Roman period	37 BCE-132 CE
Middle Bronze Age	IIA	2000-1750	(Herodian period, 37 BCE-70 CE)	
Middle Bronze Age	IIB	1750-1550	Late Roman period	132-324
Late Bronze Age	I	1550-1400	Byzantine period	324-638
Late Bronze Age	IIA	1400-1300	<i>Early Arab to Ottoman Periods</i>	
Late Bronze Age	IIB	1300-1200	Early Arab period (Umayyad and Abbasid)	638-1099
<i>Iron Age (Israelite Period)</i>			Crusader and Ayyubid periods	1099-1291
Iron Age	IA	1200-1150	Late Arab period (Fatimid and Mameluke)	1291-1516
Iron Age	IB	1150-1000	Ottoman period	1516-1917
Iron Age	IIA	1000-900		
Iron Age	IIB	900-700		
Iron Age	IIC	700-586		
<i>Babylonian and Persian Periods</i>			586-332	

《参考文献》

エン・ゲヴ遺跡関係

- 1 Schumacher,G. (1888). "The *Jaulan*: Surveyed for the German Society for the Exploration of the Holy Land" London
- 2 Mazar,B.,A.Biran,M.dothan and I.Dunayevski (1964) "Ein Gev excavation in 1961," *Israel Exploratin Journal* 14:1-33
- 3 Kochavi,M (1989) "The Land of Geshur Project: regional archaeology of the Southern Golan(1987-1988 seasons)." *Israel Exploratin Journal*39:1-17.
- 4 金関 恕 (1990)「旧約聖書時代のエン・ゲヴ遺跡」『文明発祥の地からのメッセージ』(第4回「大学と科学」公開シンポジウム予稿集)
- 5 日野 宏 (1994)『高原と湖の遺跡 - 古代エン・ゲヴ遺跡の発掘調査 -』天理大学
- 6 置田雅昭(2000)「イスラエル国エン・ゲヴ遺跡の列柱式建物とその用途」『日本西アジア考古学会第5回総会大会』日本西アジア考古学会
- 7 山内紀嗣(2000)「イスラエル エン・ゲヴ遺跡の発掘調査」『世界の考古学』関西大学出版会
- 8 桑原久男(2004)『地中海東岸地域における都市の形成と展開 - エン・ゲヴ遺跡の歴史的位置づけをめぐって -』平成 14 年度天理大学学術研究助成費研究成果報告書 天理大学
- 9 月本昭男・長谷川修一・小野塚拓造(編)(2009)『エン・ゲヴ遺跡 - 発掘成果報告 1989-2004』リトン
- 10 杉本智俊(2010)「古代イスラエルとその近隣諸国 - 2009 年度エン・ゲヴ遺跡発掘調査報告 -」『第 17 回西アジア発掘調査報告会報告集』

テル・レヘシュ遺跡関係

- 11 Aapeli Saarisalo(1927) "Tellel-Mkarkas" *The Boundary Between Issacar and Naphthali* 68-69 Helsinki
- 12 Zori, N(1977).*The Land of Issachar, Archaeological Survey*(Hebrew)
- 13 Gal,Z.(1981)Tel Rkhash and Tel Qarnei Hittin. *Eretz-Israel* (Hebrew)
- 14 Y.Goren、I.Finkelstein and N.Naaman.(2004) *Inscribed in Clay: Provenance Study of the Amarna Letters and other Ancient Near Eastern Texts*, The Institute of Archaeology of Tel Aviv University. Monograph Series 23.
- 15 山内紀嗣・日野 宏 (2006)「イスラエル国 テル・レヘシュ遺跡の予備調査」『第 13 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会
- 16 Paz,Y. and H.Kuwabara(2007) "The first Season of excavation at Tel Rekhash: the preliminary stage (15-27th March 2006)." *Orient Express*2007/1-2:17-25.
- 17 小野塚拓造・月本昭男・桑原久男(2010)「イスラエル テル・レヘシュ遺跡 2009 年(第 5 次発掘調査) - 青銅器時代から鉄器時代への移行期を探る -」『第 17 回西アジア発掘調査報告会報告集』